

43 東京法学院有志大運動会

〔法学新報〕第三七号 明治二十七年四月二十八日

○東京法学院有志大運動会

東京法学院生徒中の有志者は本月八日桜花爛漫の候を卜し奥田義人氏を委員長に朝倉外茂鐵氏を副委員長に高根義人氏を幹事に推戴して春期大運動会を向島墨田園に於て催ふせり此日や天公諸子に幸ひせず夜来春雨の輟まさるあり加ふるに道途の泥濘を以てしたるも流石は年少氣鋭の面々降る雨を物の数ともせず払眺より法学院構内に集る者陸續踵を接し午前七時の比には既に無慮六百余名と注せられたり居ること少許朝倉副委員長の統帥の下に整々堂々と法学院を繰出し洋々たる楽隊の吹奏に連れ都人士女に目送せられつ、順路墨田園に達す見渡せは運動場の入口には最と大なる日章旗を交叉し場の中央には各国の国旗目も眩き迄に翩翻たり憩ふ暇もあらず操技は既に始まれり二百ヤード競走、玉拾競走、二人三脚競走、四百ヤード競走、老人壺脚競走、障害物競走、八百ヤード競走、是にて暫時休憩午餐の後更に又操技に着手す提灯競走、八百ヤード撰手競走、院友及来賓競走、高飛、竿飛、角力、擊劍其間絶へず嚟曉たるは音楽の声なり時々鯨波の上るは優勝者を誉むるなり操技全く了るや賞品は優勝者に頒たる之を得る者の得意惟ふへし次には余興として福引の催あり時計を筆頭として其品目総て二百五十有余点

愈出て愈奇屢々人をして抱腹絶倒に耐へさらしむ福引終て散
会を告げしは人既に酔ひ日將に暮れなんとするの時なりし今や
筆を擱するに泣み諸子に一言を呈せんとす現時学生一般に都下
奢靡の風に浸染し優柔不断殆と酔生夢死の境に沈淪するの日に
際し斯壮拳を企て以て其心胆を練磨す余輩の大に欽する所以殊
に降雨を冒して奮進せるの一段に至りては最も壯とせざるを得
ず嗚呼諸子よ諸子は實に後來有為の士なり望むらくは這般の勇
気を以て学を勤め行を励まし他日大成の後我大日本帝国の為め
に將た又法学社会の為めに大に尽す所あらんことを